

書きことばにおける意味伝達の可能性

—Paralanguage 機能による味覚表現—

八木 英理子

1. 研究の目的

本研究の目的は、書きことばにおける意味伝達の可能性を追求することである。特に、言語に随伴する非言語に着目し研究を進める。

豊口（2005）⁽¹⁾は、書きことばの外見的要素（「文字の大きさ」「点画の太さ」「字間」「行間」等）を介して書き手自身の人物を読み手に伝えることができることを示している。さらに、清水・押木（2008）⁽²⁾は、「言語の内容から受ける印象と書き表す文字から受ける印象が一致したときに言葉の内容をより効果的に伝えられる」と記述しており、言語内容（ことば）と表現（文字）の「調和」が効果的な伝達を促すと述べている。

本研究ではこれらの追研究ではなく、あらたに伝達内容と表現に着目し、先行研究で述べられているようにそれぞれが「調和」することで円滑かつ的確な伝達を図れるかを検証する。ここで示した伝達内容とは、言語内容に表す具体的な書き手のイメージである。そのイメージは、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚いずれかの感覚を有すると考える。中でも最も個人動作であり共有しにくい味覚について考察することとする。

2. Paralanguage

2.1 Paralanguage とは

Paralanguage とは、人が情報を伝達しようとする時にその言語行動に伴って起こる非言語の動作であり、周辺言語とも呼ばれる。

私たちは精神内容を含めた伝達の多くを、言語という媒体を用いて表現・伝達する。そして、そこには Language（言語）と Paralanguage が

同時に内在している。Language と Paralanguage は不可分に結びついた一体の表現記号であって、お互いの補足によって伝達の目的が達せられる。Language とは言語メッセージであり Paralanguage は非言語メッセージである。

Paralanguage について、従来の研究では音声言語に限られるものが多い。しかし、押木（2006）⁽⁸⁾の考察では、言語によるコミュニケーション構造を考えると、文字言語においても Paralanguage もしくはそれに類する要素が機能している可能性が十分あり得るとしている。以後 Paralanguage 機能とはこの文字言語上の Paralanguage を示すものとする。書きことばにおける Paralanguage 機能とイメージの構築については、音声学等の分野の知見が参考にできると考える。

3. Context と Background

3.1 「ハイコンテキスト文化」と「ローコンテキスト文化」

私たちは自分がある言葉をもって表現している事物を他人も同じように表現・理解していると考えている。ところが、実際は人によってニュアンスや表現は異なってくる。また、同じ言葉でも指し示す内容が異なる場合もある。このように言葉や表現の前提を定義づける背景や状況そのものものを Context という。

アメリカの文化人類学者エドワード・T・ホール⁽⁴⁾は、Context 度が高いコミュニケーションの場合、受け手と場・状況の中にあらかじめ情報がプログラムされており、伝達されるメッセージの中には最少の情報しかない述べている。また、Context 度の低いコミュニケーションではその逆である。

4. 調査

4.1 調査1の方法

調査1では、筆記被験者（書き手）に「野菜のトマト」の文字を書いてもらう。まず、通常の書きぶりで書いてもらう。次に、「甘い」「苦い」「酸

っぱい」の3つの味覚条件を順に提示し、それぞれを表現した「野菜のトマト」の文字を書いてもらう。さらに、それぞれの味覚条件をどのように表現したか、表現意図を記述してもらう。筆記具は、鉛筆やサインペン等の硬筆よりも表現の幅が広い毛筆を採用する。

4.2 調査2の方法

調査2では、調査1で筆記被験者が書いた「野菜のトマト」の文字を外見的要素から読み取るサンプルとして調査用紙を作成する。そのサンプルを評価被験者（読み手）に見てもらい、どのような味覚が感じられるかを以下の質問項目に沿って回答してもらう。サンプルの選出方法は、調査1の各条件の下で書かれたそれぞれの文字の変化が顕著なものを選んだ。ここにおける文字の変化の観点とは、線、字形、配列の3つとした。その結果、筆記被験者3名のもものが選出された。

調査2 質問項目

- (1) どんな味が連想されますか。
- (2) (1)の味を連想させた要素は何ですか。
- (3) これまであなたが食べたことのあるトマトの味をすべて書き出してください。
- (4) 「野菜のトマト」と言われて、最初に思いつく味を教えてください。

5. 調査の結果と考察

5.1 調査1の結果と考察

調査1では、筆記被験者がそれぞれの味覚に対してどのような書き分け、表現の工夫を行ったかを調査した。この調査では、1つの味覚表現に対し1人の筆記被験者が複数の表現の工夫を行っている。甘い「野菜のトマト」を表現する際、最も多かった表現要素は、文字の字形に「丸み」を出すことであった。筆記被験者8人中7人が「丸み」で甘味を表現しており、理由として、柔らかいイメージを伝えるためと回答している。その他、文字の「配置を中心」に持つてくることや墨を多くつけることで「にじみ」を出し甘味を表現する筆記被験者がそれぞれ2人ずつ存在した。

酸っぱい「野菜のトマト」の表現方法は、食べたときに縮こまるという動作イメージから線を「細く」した被験者が4人いた。その他、「震わせる」工夫を施したり、配置を「中心」にしたりする工夫、字形を「右肩上がり」にすることで勢いを表現する被験者がそれぞれ1人ずついた。また、5人の被験者が酸味の刺激を線の「鋭さ」で表した。ほとんどの筆記被験者たちは酸味の刺激をイメージして刺々しさが伝わるように工夫したと記述している。

同様に筆記被験者が刺々しさをイメージしたものが、苦い「野菜のトマト」である。さらに「鋭さ」や「強さ」で苦味を表現している。また、苦味から飲み込めない、口に残るというイメージから「にじみ」、「太さ」、勢いを無くすために「右肩下がり」にするなどの工夫が見られた。その他、苦い時に舌を出すというイメージから「配置を下」にしたり、苦しさを表現するのに「かすれ」させたりしている。

エルンスト・マッハ(1981)⁽⁶⁾は「一つの名辞は全体を表わす。一つの語句は、まるで糸をたぐるように、共属している記憶の全部を忘却の淵から一度にひき出す」と述べている。上記の結果から分かるように、甘い、酸っぱい、苦いという条件の書かれた「野菜のトマト」は、味覚イメージからだけでなく、その条件下で同時に想起された五感イメージを頼りに表現している。エルンストやA・コンドラートフ(1967)⁽⁶⁾、深田・仲本(2008)⁽⁷⁾らが述べるように、人間は複数の感覚を同時に働かせて物事を知覚しているのである。筆記試験者はその中から特に際立ったもの、さらには自身が表現できるものを取捨選択している。

甘い「野菜のトマト」を表現する際に最も多かった表現要素は「丸み」である。そもそもトマトという野菜は丸みを帯びている為、「野菜のトマト」の味ではなく視覚イメージが先行して表現されているのではないかと推察される。しかし、酸っぱい「野菜のトマト」や苦い「野菜のトマト」を表現した要素に「丸み」の記述は見当たらなかった。そのため、先述の表現要素は味覚イメージに伴ったものである。さらに、甘味を「丸み」で表現した筆記被験者の多くは柔らかさをイメージしたと記述している。すなわち、『甘い「野菜のトマト」ーやわらかいー丸み』といったイメージを連

想したと考える。同様の流れで、他のイメージも甘い「野菜のトマト」を中心として蜘蛛の巣状に連想されたと推察する。調査 1 の筆記被験者がこの集合体の中で表現可能なものとして選び出したのが、「丸み」であり「にじみ」「中心に配置」することである。酸っぱい「野菜のトマト」や苦い「野菜のトマト」も中心が変わっただけで思考の流れは同様であると考えられる。この集合体の内容や大きさは、書き手の Context や Background により差がある上、書き手の技術や感性により表現方法も個人差がある。同じ表現要素を選択していたとしても同じもの、似たものができるとは限らない。

筆記被験者は本節に記した要素を用い、甘味・酸味・苦味を表現した。これらを書き手の意識を遡るように読み取る読み手はどのように解釈するのだろうか。調査 2 では、読み手が書きことばのどのような要素や表現に注目し読み取るのかを調査する。

5.2 調査 2 の結果と考察

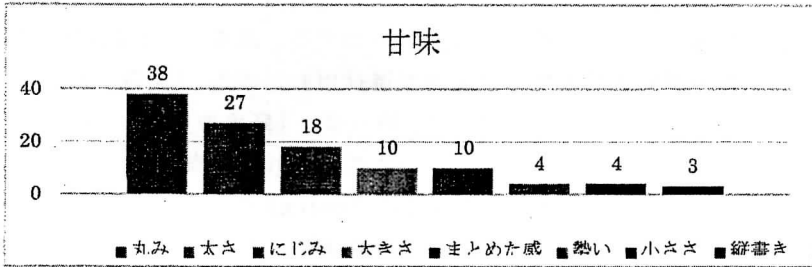
調査 2 では、提示した 9 サンプルに対して評価被験者がどのような読み取りを行うかを調査した。本節では、評価被験者が書きことばのどの要素に着目しどのように読み取るかを考察する。書き手と読み手間での伝達について、またその正確さについては次節にて述べることにする。

調査 2 の回答は、多いものから「甘い」「酸っぱい」「甘酸っぱい」「おいしい」「濃い」「薄い」などが挙げられた。他にも少数回答ながら、「苦い」「渋い」「まずい」「無味」など幅広い回答が得られた。さらに、味覚だけでなく視覚、聴覚、嗅覚、触覚で捉えた回答も複数得た。

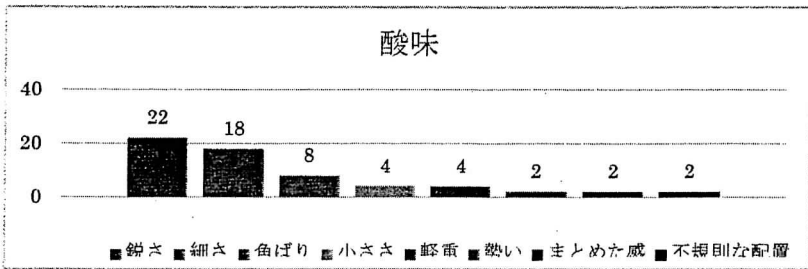
本研究では、味覚を基本味と呼ばれる 5 つの味覚の中から甘味・酸味・苦味の 3 つに注目して研究を行う為、本節の味覚の読み取り方については上記 3 つの味覚を挙げた回答を抽出して分析を行う。

各サンプルに対して「甘い」という回答をした評価被験者の多くは、「丸み」「太さ」「にじみ」「大きさ」から甘味を読み取っている。これらの割合をグラフ 1 に示す。同様に、「酸っぱい」と回答した評価被験者がそれを読み取った要素はグラフ 2 の通りである。ただし、グラフに示す要素は回答が 2 個以上のものに限る。

グラフ 1 評価被験者が甘味を感じた要素

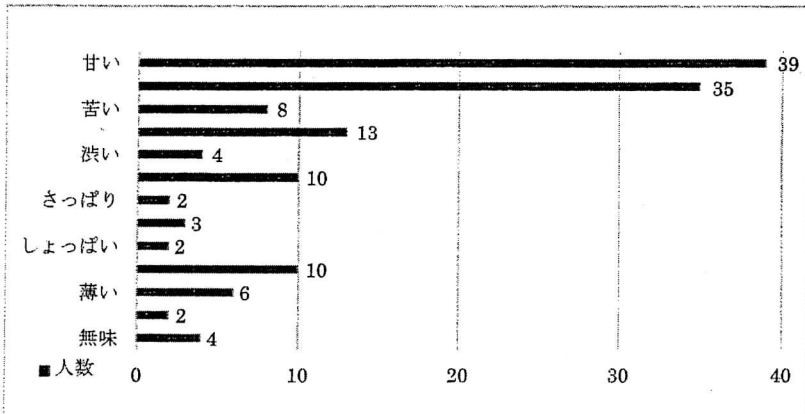


グラフ 2 評価被験者が酸味を感じた要素



さらに、調査 2 の問 3 の回答を以下にまとめた。この回答により、評価被験者が「野菜のトマト」に対する味覚の Context を数値化したものとする。

グラフ 3 「野菜のトマト」に対する味覚の Context



(複数回答有，グラフ表記要素は回答が2名以上のものに限る。)

5.3 調査全体の考察

本節では，調査1と調査2の正答率を伝達率と仮定し，味覚表現における Paralanguage 機能について考察する。

甘味・酸味・苦味の各3サンプル，計9サンプルを評価した被験者全体の伝達率は，1人あたりの平均1.84サンプルであった。9サンプルのうちで多い人は6サンプル，少ない人は1つも筆記被験者が意図した味覚を読み取ることができなかった。この結果から，Paralanguage 機能を読み取る能力は個人差が大きいことが分かる。Context や Background の差異が関わってくると考えられる。これに関わって，筆記被験者・サンプルごとの伝達率をみると，以下の表1のような結果となった。

表1 筆記被験者・サンプル別伝達率

	甘味	酸味	苦味
筆記被験者 A	【1】 27.9%	【2】 20.9%	【3】 2.3%
筆記被験者 B	【5】 14.0%	【6】 18.6%	【7】 7.0%
筆記被験者 C	【9】 41.9%	【10】 44.2%	【11】 0%

(小数第2位で四捨五入，【】内は調査2アンケート用紙で使用した番号と対応)

筆記被験者ごとでも伝達率に幅が見られる。つまり，Paralanguage 機能によって味覚を表現したり解読したりする能力は個人差が極めて大きいことが分かる。また，同一の筆記被験者でも味覚，すなわち伝達内容ごとに差が出ている。筆記被験者に提示した味覚ごとの伝達率は，以下の表2の通りである。苦味の伝達率は3.1%にとどまっているが，甘味・酸味は27.9%とほぼ同じ数値となった。

表2 味覚別伝達率

甘味	酸味	苦味
27.9%	27.9%	3.1%

(小数第2位で四捨五入)

その一方で、同回答に対しての伝達率（伝達の精度）は、表 3 のような結果が得られた。表 3 は、サンプル番号に関わらず全ての回答に対し、甘味・酸味・苦味いずれかを感じたとする回答のみを抽出し、さらにそこの伝達率を算出したものである。

表 3 伝達の精度

	甘味	酸味	苦味
回答数	80	49	7
正答数	46	36	4
精度	57.5%	73.5%	57.1%

(小数第 2 位で四捨五入)

表 2 に関して、一見、甘味と酸味の伝達の成果は同等のもののように見える。しかし、表 3 を参照すると、伝達の精度は甘味よりも酸味の方が 1.3 倍も高いのである。また、苦味の伝達の精度は 57.1% と甘味とほぼ変わらないのにも関わらず、伝達率では甘味の 9 分の 1 という結果になった。これらの要因として考えられるのは次の 2 点である。

第 1 に、読み手が甘味を感じる Paralanguage 機能の要素が多い。表 3 より、サンプル全体で「酸っぱい」と回答されたのが 49 個に対し、「甘い」と回答されたのが 80 個ある。内、書き手の意図とあっているものは、酸味が 73.5%、甘味が 57.5% である。つまり、甘味は伝達率では 27.9% と酸味と同じ数値ではあるが、全体の回答数の中でみると甘味を感じるとした回答の約 4 割は正確な味覚の伝達できていないことになる。読み手が甘味を感じる Paralanguage 機能の要素の種類が多くあるため回答数が増え、その分伝達率も上がったのではないかと推考できる。

第 2 に、読み手が酸っぱいと感じる Paralanguage 機能の要素は個人差が小さい。表 3 に示したように酸味に関しては、酸っぱいと回答した人数が甘いと回答した人数より少ない。そしてその 73.5% が正答していることから酸味表現の要素は個人差が小さいことが分かる。

苦味は伝達の精度で見れば、57.1% と甘味の伝達の精度と変わらない数値となっているが伝達率は甘味・酸味の両者から大きく引き離されている。

この要因として考えられるのは、今回の Language が「野菜のトマト」だったということである。「野菜のトマト」に苦味を感じたという経験は甘味・酸味に比べてはるかに少ない。グラフ 3 を参照すると、Language である「野菜のトマト」で苦味を感じたことがある評価被験者は 8 人である。つまり、評価被験者の多くは「野菜のトマト」に苦味を感じるという Context を持ち合わせていないのである。先入観から苦味を読み取ることができなかった評価被験者もいる。Language が「野菜のトマト」ではなく、例えば「野菜のゴーヤ」であったならば、今回行った調査の伝達率の数値とは異なったものになると考えられる。同じ表現要素でも Language によっては違う味覚として読み取られることが推測される。

以上の考察をふまえ次章では、本研究の成果と課題について述べる。

6. 研究の成果と課題

6.1 研究の成果

前章での調査結果では、Paralanguage 機能を用いた味覚の伝達率は 19.7% となった。しかし、本調査を通じて何のイメージも持たなかった筆記被験者・評価被験者は 1 人もいない。Paralanguage 機能はイメージを誘発する刺激として機能しているのである。本調査からは、字形の「丸み」や線の「太さ」は主に甘味の、線の「鋭さ」や「細さ」は主に酸味の味覚イメージを誘発するという結果を得た。評価被験者においては、味覚以外に視覚、聴覚、嗅覚、触覚で捉えたもの、また、これらの感覚を複合的に機能させたものをイメージした者も多い。深田・仲本 (2008) (6) は「人間は複数の感覚を同時に働かせながら、事態を知覚している」と述べている。味覚以外の他の感覚で捉えたものを複合的に加味して、1 つの物の味を知覚しているのである。本研究では、味覚に特化した調査を行ったが、他の感覚器官で捉えた要素を複合したイメージで書きことばを表出したのであれば、Paralanguage 機能を用いた味覚の伝達率に関して異なった結果を得られると考える。

なお、本調査の結果からは、Language の内容を全く無視し Paralanguage 機能からのみ読み取りを行うという、Paralanguage 機能に

よる伝達内容の支配が見られた。例えば、調査 2 で得た「レタス」「クリームシチュー」「ペペロンチーノ」という回答は Language の内容である「野菜のトマト」の味とは無関係であり、Paralanguage 機能にのみ注目して書きことばの伝達内容を読み取っている。表出された書きことばから幅広い読み取りを行うことができるという可能性を秘めている点は Paralanguage 機能の魅力である。しかしながら、Paralanguage 機能からの読み取りが各個人の想像の力に左右されやすいということでもある。Paralanguage 機能は、Language の内容以上の伝達が可能になる反面、Paralanguage 機能の要素に明確な意味づけがされていないために読み手ごと読み取り内容が異なる可能性があるという二面性を持つ。

以上のことから、Language の内容を補足する Paralanguage 機能の効果の一端を捉えた。書きことばを用いて書き手のイメージを読み手に対して的確に伝達することができる可能性は多分にあることが明らかとなった。

6.2 今後の課題

最後に本研究の課題として、以下の 4 点が挙げられる。

1. 被験者の数を増加すること。
2. 本調査で使用したものと異なる Language 内容で調査を行うこと。
3. 調査の考察において書き手・読み手それぞれの嗜好が Paralanguage 機能に与える影響を考慮すること。
4. 評価被験者の回答から得た Paralanguage 機能による支配について考察をさらに深めること。

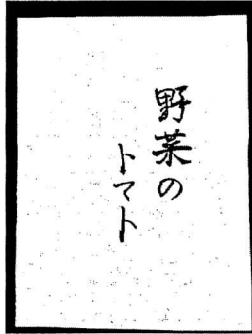
以上列挙したように、Paralanguage 機能を用いた味覚の伝達について考察するためには熟考を要すべき観点が何点か存在する。これらを今後の課題とする。

【参考資料】

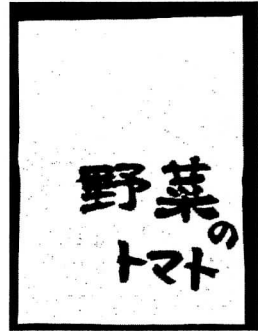
筆記被験者 A 【1】



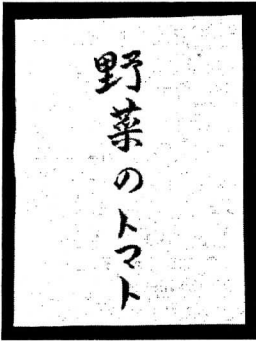
【2】



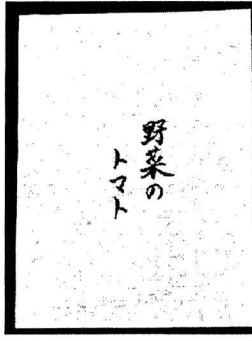
【3】



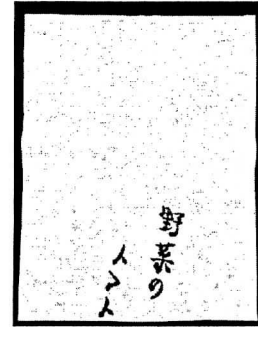
筆記被験者 B 【5】



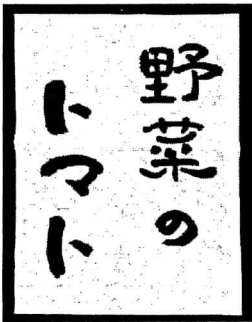
【6】



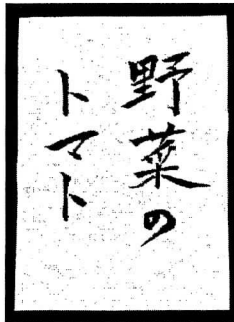
【7】



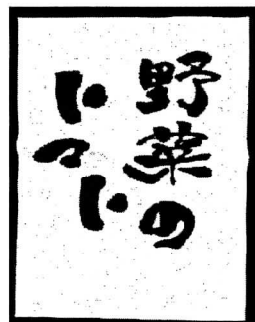
筆記被験者 C 【9】



【10】



【11】



【注】

- (1) 豊口和士 (2005) 「「手で書く」ことに対するコミュニケーション論の視点」(『書写書道教育研究』20号, 20号, 全国大学書写書道教育学会, pp.19-29) p.22
- (2) 清水陽一郎・押木秀樹 (2008) 「書字における機能とその意識化による国語科書写指導—書字目的や文化的・社会的コードを中心として—」(『書写書道教育研究第』, 23号, 全国大学書写書道教育学会, pp.69-79) p.75
- (3) 押木秀樹 (2006) 「これからの書写書道教育学：内容論・教材論の立場から」(『書写書道教育研究別冊』創立20周年記念号, 全国大学書写書道教育学会, pp.22-25) pp.22-25
- (4) エドワード・ホール著／岩田慶治・谷泰訳 (1993) 「新装版 文化を超えて」TBSブリタニカ, pp.68-69
- (5) エルンスト・マッハ著／須藤五之助, 廣松渉訳 (1981) 「感覚の分析」法政大学出版社, p.88
- (6) A・コンドラートフ著／島原落穂訳 (1967) 「音と記号」ラテイス, p.68
- (7) 深田智・仲本康一郎 (2008) 『〈講座 認知言語学のフロンティア③〉概念化と意味の世界—認知意味論のアプローチ—』研究社, p.123
- (8) 深田智・仲本康一郎 (2008) 『〈講座 認知言語学のフロンティア③〉概念化と意味の世界—認知意味論のアプローチ—』研究社, p.123

【参考文献】

- ・エドワード・ホール著／岩田慶治・谷泰訳 (1993) 「新装版 文化を超えて」TBSブリタニカ
- ・エルンスト・マッハ著／須藤五之助, 廣松渉訳 (1981) 「感覚の分析」法政大学出版社
- ・押木秀樹 (2006) 「これからの書写書道教育学：内容論・教材論の立場から」(『書写書道教育研究別冊』創立20周年記念号, 全国大学書写書道教育学会, pp.22-25)
- ・清水陽一郎・押木秀樹 (2008) 「書字における機能とその意識化による国語科書写指導—書字目的や文化的・社会的コードを中心として—」(『書写書道教育研究第』, 23号, 全国大学書写書道教育学会, pp.69-79)
- ・豊口和士 (2005) 「「手で書く」ことに対するコミュニケーション論の視点」(『書写書道教育研究』20号, 20号, 全国大学書写書道教育学会, pp.19-29)
- ・深田智・仲本康一郎 (2008) 『〈講座 認知言語学のフロンティア③〉概念化と意味の世界—認知意味論のアプローチ—』研究社
- ・A・コンドラートフ著／島原落穂訳 (1967) 「音と記号」ラテイス

(やぎ えりこ 株式会社ミサワ)